こうして『龍の子学園』が生まれた

～デフ・フリースクール『龍の子学園』の歴史～

龍の子学園事務局

○池田　亜希子　　○小野　広祐　　樞　陽子　　竹内　かおり　　○長谷部　倫子

■はじめに　～発表要旨～

1999年4月24日、東京都水元青年の家にて、「龍の子学園」が開校した。ろう者によるろう者のためのバイリンガル・バイカルチャー教育実践の場である。バイリンガル・バイカルチャーとは、2つの言語（日本手話と日本語）と2つの文化（ろう文化と日本文化）のことである。日本手話の環境におけば、聴児が日本語を獲得するプロセスと同じように、ろう児は日本手話を自然に獲得することができる。ろう者の言語である日本手話を共通言語とすることによって、ろう者の言語や文化の継承を図り、さらに、日本手話で日本語の読み書き能力を高めるーこれが、バイリンガル・バイカルチャー教育の目的である。我々は、ろう児が自らの言語ー日本手話ーで教育を受け、ろう者としての誇りと自信に満ちた子どもを育てたいという願いから、龍の子学園を開校した。

今回は、なぜ龍の子学園が生まれたのか、これまでの経過と現在の取り組み、そして今後の展望について発表したい。

■1．口話教育とインテグレーション　～混沌としたろう教育の現状～

日本で口話教育が始まったのは、大正20年の頃である。西川吉之助による口話研究所の設立、口話教育を目指した日本聾話学校の開校、名古屋聾学校の口話教育推進などが相次ぎ、口話教育は徐々に普及していった。戦後になると、補聴器の発達とともに口話教育はますます盛んになっていった。手話は口話を妨げるものとして厳しく禁じられ、教室から排除されていった。

口話教育は、ろう児が聞こえる子どものようになることー口で話したり耳で聞いたりすることーを目指し、早期からの補聴器の使用による聴覚活用、読話や発音訓練などを行なってきた。聴覚障害を克服し、音声語を獲得しなければ社会に入れないとい考え方のもとで、本来学校で学ぶべき知識や教養よりも、音声日本語の教育に重きが置かれてきた。しかし、150年以上もの長い間、口話教育による努力が続けられたにも関わらず、現在もなお、多くのろう児たちの学力や日本語の力は低迷したままである。

一方、一般学校へのインテグレーションは、昭和30年代から増加し始めた。「聞こえなくても聞こえる子どものようになれる」という口話教育の成果がインテグレーションであり、多くの子どもたちがインテグレーションしていった。また、ろう学校は生徒数が少ない特殊な世界であり、社会性や常識・学力が身につかず、現在の高学歴社会の中で自立するためには、やはりインテグレーションが最良の方法であるという見方があった。しかし、インテグレーションは一般学校で孤立しやすく、同じろうの仲間に出会うこともなく、社会性や常識を身につける機会がほとんどない状態である。学校を卒業してからも、一般社会にもろう社会にも入れず、孤立してしまうことがままある。また、授業内容もほとんど分からないままに進められることが多く、落ちこぼれてしまう子どもも少なくはない。

■2．龍の子学園ができるまで　～こうして龍の子学園ができた～

低迷したままの学力や日本語力、孤立したインテグレーション。このようなろう児たちの悲惨な現状をなんとかしたいと考えた有志が集まり、子ども人権救済センターの弁護士と相談し、1998年9月に「ろう教育を考える会」を発足した。ろう教育を考える会で話し合う中で、「ろう学校のモデルを作ろう。まず、フリースクールを！」と発言したメンバーがいたのが始まりであった。フリースクール担当（後身、龍の子学園事務局）が決まり、関連資料を集めたり、フリースクールを見学したりしながら、ろう児のためのフリースクールの設立構想を練っていった。

「龍の子学園」という名称に決まったのも、その頃である。中国では、龍は空を自由に駆け回り、雲を呼び、雨を降らす神様として大切にされている。また、龍は頭が良く、立派な人にも例えられる。この龍には耳がない。龍のように、聞こえないことが全くマイナスイメージとならず、強くたくましく自由に生きる子どもたちに育ってほしいーという願いから「龍の子」という名称が生まれた。

龍の子学園の理念も、ほぼ次のように決まっていった。「聴者に近づける教育ではなく、ろう者としての誇りと自信に満ちた子どもに育ってほしい。口話教育よりも、人間教育の場でありたい。」

■3．龍の子学園の取り組みと今後の展望　～理想のろう教育に向けて～

1999年4月に開校して以来、毎月1回第4土曜日に学園活動を行なっている。幼稚部から中学部までのろう学校・一般学校に通うろう児が集まり、レクリエーションや日本手話による教科学習を行なっている。毎回子どもを募集しているため、参加人数は一定ではないが、毎月30名近くの子どもたちが参加している。そのうちの約4分の1がインテグレーションである。子どもたちは、幼稚部・小低部（小1～3）・小高部（小4～6）・中学部の4グループに分かれ、それぞれ学年や発達に応じた指導を受けられるようになっている。時々、ハイキング・キャンプ・運動会・クリスマスパーティなどの行事も行なっている。

ろう児たちが、本来もっている能力を発揮するためには、お互いに理解しあえる共通の言語が必要である。そのため、指導に当たるスタッフは、日本手話・日本手話を獲得していることを条件にしている。他にも、バイリンガル・バイカルチャー教育の研究・実践者として活動できること、子どもとのコミュニケーションを第一とし、子どもの能力を正しく評価しうまく引き出せること、などの条件がある。現在は約30名のスタッフが登録されており、ほとんどがろう者である。中にはコーダ（ろうの両親をもつ聴者）や日本手話通訳者もいる。

龍の子学園が開校して1年も経っていないが、ろう学校の子どもも、インテグレーションの子どもも、生き生きと龍の子学園に集まってくる。日本手話を通して、お互いに十分に理解しあえるという安心感が、子どもに生き生きとした喜びを与えているのだろう。ろう児にとってロールモデルとなりうるろう者と触れ合いは、ろう児たちに自信と夢をもたらしているようである。いずれは、より積極的に社会参加ができるようになるだろう。手話による教科カリキュラムや教材、日本語の指導方法などの課題は数多くあるが、今後とも、実践や研修を積み重ねていきたい。口話教育から人間教育へ。龍の子学園の取り組みが、ろう教育の問題解決のきっかけになれれば、と願ってやまない。